



Title	<書評>Lauren Freeman and Jeanine Weekes Schroer (eds), Microaggressions and Philosophy, Routledge, 2022.
Author(s)	赤木, 優希
Citation	年報人間科学. 2025, 46, p. 29-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100516">https://doi.org/10.18910/100516</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

**Lauren Freeman and Jeanine Weekes Schroer (eds), *Microaggressions and Philosophy*, Routledge, 2022.**

赤木 優希

## 1. はじめに

本書は、マイクロアグレッションに関する哲学的な研究を収めた論文集である。マイクロアグレッションは「意図の有無を問わず、特定の個人や集団を標的にし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教などに対する軽視や侮辱を含む、日常の中に潜むささいな言葉や行動、状況」（Sue 2020）と定義される、差別の一様式である。それは、被害者が周縁化された集団に属する場合、極めて一般的かつ持続的に発生し、被害者に対して心理的（Pierce 1970）および身体的な健康への被害（Sue 2010）を及ぼすと指摘される。先行研究において、マイクロアグレッションに関する研究は、心理学や社会学など実証的な研究領域において蓄積されてきた（丸一 2022, 金 2006）。これに対して、哲学的な手法によってこの領域に切り込んでいる点に、本書の独自性がある。本稿は、こうした特徴をもっとも鮮明に体现している Regina Rini の論文を中心にしながら、その意義と制約を検討する。

## 2. 本書の構成と概要

前述の通り、先行研究において、マイクロアグレッションの研究は主として実証的な研究手法によって蓄積されてきた。それに対して哲学的な分析は、実証的研究では十分に取り組むことができない、概念そのものの検討および規範的指針を基礎づけることで、議論を補完する役割を担うことができる。

こうした問題関心に基づきながら、本書は、心理学、実証的哲学、フェミニズム哲学、批判的人種理論、障害者理論、言語哲学、科学哲学、社会・政治哲学など、多様な視点を取り入れた論集として構成されている。また本書は、非白人、障害者、多様な民族およびジェンダー・アイデンティティを持つ者たちが寄稿した編著であり、多様な分析枠組みによってマイクロアグレッションの問題に迫っている。

本稿では、こうした本書の特徴をもっとも典型的に示す論文として、Rini の “Taking the Measure of Microaggression: How to Put Boundaries on a Nebulous Concept” に注目する。彼女の問題関心は、どのような出来事がマイクロアグレッションと見なされるべきか、そしてそのように判断できる差別の程度や水準の「上限」をどのように定めるべきか、という点にある。

### 3. マイクロアグレッションの再定義

Riniの議論の目的は、マイクロアグレッションの概念を明確に定義することである。彼女によれば、この概念が曖昧であるがゆえに、科学的に扱いにくく、それによって社会的な不安が引き起こされている。彼女は特に、ヘイトクライムとマイクロアグレッションの違い明確にし、その理論的な区別が集団的責任に関する議論を前進させることができる、と主張する。

ヘイトクライムは、一般に憎悪や偏見が意図的かつ公然と示される暴力的行為であり、抑圧的な社会システムを維持する役割を果たす。一方、マイクロアグレッションはより微妙で、曖昧であり、しばしば意図的な攻撃を伴わないが、長期的には同様に抑圧的な効果をもたらす可能性がある。Riniは、この二つの概念の境界を明確にすることで、私たちがどのように社会における抑圧の役割を理解し、対応するかに対する洞察が得られると考えている。同時に彼女は、マイクロアグレッションに上限を設ける必要性を訴える。なぜなら、それがあまりに広範囲で多義的に解釈されると、社会的な誤解を助長させるからである。

Riniは、マイクロアグレッションの定義とその測定に関して、「変数的な尺度」と「機能的な尺度」という二つの異なるアプローチを検討する。変数的な尺度は、物理的な大きさや量的な広がりに基づいてマイクロアグレッションを測定しようとするものであり、マイクロアグレッションは単なる「小さな攻撃」として扱われる。しかし、このアプローチでは、マイクロアグレッションの社会的機能を十分に捉えることができない。それに対してRiniは、機能的な尺度、すなわちマイクロアグレッションを抑圧的な社会システムの中で機能する「部分」として捉えることの必要性を訴える。この場合、マイクロアグレッションはその「大きさ」ではなく、その社会的な機能において重要であり、社会システムにおいてどのように作用しているのか、という視点が重要になる。

Riniによれば、マイクロアグレッションとヘイトクライムとの最も重要な違いは、「明示性」にある。ヘイトクライムは、差別的な意図や偏見が公然と示される行為であり、その抑圧的な性質は誰の目にも明らかである。しかし、マイクロアグレッションはしばしば意図的でないように見え、加害への認識が曖昧な場合が多い。このような曖昧さが、ある行為をマイクロアグレッションとして認定することを困難にする。Riniは、マイクロアグレッションの「非明示的」な性質が、抑圧的な社会構造を維持するための巧妙な手段となっていることを指摘している。

マイクロアグレッションに関する問題点の一つは、被害者の個人的体験に焦点を当てず、マイクロアグレッションを社会的機能として抽象的に扱うことにある。これは、被害者の体験が抑圧の証拠として捉えられる一方で、実際にマイクロアグレッションとみなされる出来事を、客観的かつ非個人的な社会的な機能に基づいていると見なす。Riniは、このアプローチに異議を唱え、マイクロアグレッションの概念を被害者の体験を中心に据えるものとして捉え、その体験に対する認識の境界を提供する形で、再定義する。

#### 4. 境界としての「曖昧さ」

なぜ被害者の経験が重要視されるべきかについて、Riniは、マイクロアグレッション研究に先鞭をつけたPierce（1970）自身の被差別経験を手がかりに分析している。そこで重要な問題として浮かび上がってくるのは、マイクロアグレッションに伴う曖昧さである。彼の経験は、「被害妄想とはいかなくても、過敏になっている」可能性があることを「認めて」おり、この自責の念において、しばしば「帰属の曖昧さ」を見て取ることができる。心理学において、これが被害者にとって心理的な害をもたらすことが説明されている。Kristen（1970）は、微妙な差別に関連する曖昧さが、被害者がその出来事の原因を特定できない状態にさせ、結果的にその出来事が反復的に心に残り、時間をかけて心理的に蓄積されることを指摘している。このような曖昧さは、被害者がガスライティングを受けやすくなる要因ともなり得る。

機能的分析において、帰属の曖昧さが抑圧という社会的構造の副産物と見なされ、マイクロアグレッションの認識はその曖昧さによって永続化されるとされる。しかし、Riniは、帰属の曖昧さをマイクロアグレッションの重要な要素として位置づけ、それがどのように認識されるかが、個々の体験に依存することを強調する。彼女によれば、マイクロアグレッションとは、「被害者が抑圧的な状況で不当な扱いを受けた可能性を感じつつ、確信を持ってない経験」として定義される。ある出来事がマイクロアグレッションとみなされるかどうかは、外部の評価によるものではなく、あくまで個々の被害者の認識によって決定される。例えば、ある出来事がマイクロアグレッションと見なされるかどうかは、それがどれほど抑圧的であるかに関する被害者の認識によって異なる。そしてその認識は、被害者が属する背景によって異なるため、同じ社会的状況においても、異なる被害者が異なる反応を示すことになる。

Riniによれば、機能的分析におけるマイクロアグレッションの認識の相違に対して、曖昧な経験を受け入れることが重要である。被害者の経験が認識される際に、その評価が個人の主観的な認識に基づくことは認められるべきであり、外部からの絶対的な正しさを求めることはできない。例えば、同じマイノリティ集団に属する二人に同じマイクロアグレッシブな出来事が起きたとき、一方がそれをマイクロアグレッションではないと言い、もう一方がそれをマイクロアグレッションだと言う場合、それはどちらも正しい。この個人の曖昧な経験を重く捉える視点により、異なる意見や評価の相違を解決する必要があるとするRiniの立場は、機能的分析が持つ問題点を克服することができるのだ。

そして、曖昧な経験に関する説明は、マイクロアグレッションの概念における上限を設定する。彼女の定義において、マイクロアグレッションは、被害者が経験した出来事が抑圧的なものであるかどうか確信が持てない場合に適用され、その出来事が抑圧的であると確信が持てる場合には、マイクロアグレッションではなく、むしろそれよりも「大きすぎる」と見なされる。このように、Riniの立場において、マイクロアグレッションは、明示的な抑圧行為を指すものではなく、あくまで曖昧な経験として認識されるべきだとされる。

## 5. おわりに

Riniが提案するマイクロアグレッションの概念の定義には、大きく分ければ、以下の二つの意義がある。第一に、マイクロアグレッションかどうかは、個々の経験に基づくものであり、出来事の種類に関わらず、個人によって受け取り方が異なることを理解する必要性を明らかにした点である。すなわち、マイクロアグレッションの認識は一義的でなく、各個人の経験や視点によって変動することを示唆している。第二に、マイクロアグレッションに関する道徳的な議論において、個々の経験を尊重することの重要性を強調している点である。彼女の理論は、道徳的批判が科学的議論に与える影響を軽減し、マイクロアグレッションの議論をより建設的かつ実践的な方向へと導くことに寄与する。

しかしながら、Riniの議論には懸念点も存在する。それは、マイクロアグレッションをどのように防ぐべきかについて具体的な言及がない点である。Riniは、個人の経験に基づく認識を重視しているが、社会全体で共有される共通認識を確立しなければ、マイクロアグレッションを防止することは困難である。なぜなら、話し手は、何が相手にとってマイクロアグレッションに該当するのかについて疑念を抱くことになり、その結果、「何も言わない方が良い」という極端な反応を引き起こす可能性があるからである。

それにもかかわらず、彼女のアプローチはマイクロアグレッションに対する新たな視点を提供しており、個人の認識に焦点を当てる点で非常に意義深いものである。特に、マイクロアグレッションに対する批判の一つである「過度に敏感である」という指摘に対し、彼女の議論は直接的に対抗するものであり、被害者個人の生活体験や置かれた状況を尊重する立場を取る点で評価されるべきである。また、マイクロアグレッションに上限を設定する試みは、これまでにない新しいアプローチであり、この点についての批判さえも、マイクロアグレッションの概念に対する新たな方向性を示唆するものであるという意味で、この分野における重要な貢献をした研究であると評することができるだろう。

## 参考文献

- [1] Jones, Kristen P, et al., “Subtle Discrimination in the Workplace: A Vicious Cycle”, *Industrial and Organizational Psychology*, 10(1), 51-76.
- [2] Pierce, Chester, 1970, “Offensive Mechanisms”, *The Black Seventies*, 265-282.
- [3] Rini, Regina, 2020, “Taking the Measure of Micro-aggression How to Put Boundary on a Nebulous Concept”, *Microaggressions and Philosophy*, 101-120.
- [4] Sue, Derald W, 2010, *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*, Wiley & Sons.
- [5] Sue, Derald W, 2019, “Microaggressions and Student Activism: Harmless Impact and Victimhood Controversies”, *Microaggression Theory: Influence and Implications*, 229-243.
- [6] 金友子, 2006, 「マイクロアグレッション概念の射程」, 『生存学研究センター報告』, 第 24 巻, 立命館大学生存学研究 研究所, 105-123.
- [7] 丸一俊介, 2022, 「心理支援の現場から見るマイクロアグレッション：在日コリアンカ ウンセリング&コミュニティ センターの歩みから」, 『現代思想』, 第 50 巻, 第 5 号, 青土社, 186-194